

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
東日本大震災・復興支援関連研究(個人研究型)
2011年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属・職名		氏名			
	文学部・教授		野中 健一 印			
研究課題	東日本大震災による食用野生生物資源への影響とその食文化を守るための研究					
研究期間	2012 年度～			2014 年度		
研究経費	2012 年度	2013 年度	2014 年度	総計		
	500 千円	500 千円	500 千円	150 千円		

研究の概要(200～300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究は、東北地方で伝統的に利用されてきた野生生物資源を対象として、東日本大震災により被害を受けた地域およびその周辺の利用継続の可否を検討するとともに、また、将来の安全な利用を進められるような方策を検討する。

とくに放射能汚染により野生生物の食用や採集活動の制限に対して、これらの住民生活における価値を明確にすること、また、研究協働により、汚染状況の把握と将来への摂取の安全性の検討への基礎資料とすることを目的とする。そして、野生生物資源利用における一連の人間活動をその土地を形作る文化の中に位置づけ、放射能汚染という危機に対して、安全かつ文化的な生活への適切な対応を取られるよう価値づけることをめざす。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[野生食料資源] [放射能汚染] [食習慣]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

福島原発事故による放射能汚染によって、福島県やその周辺地域で住民の伝統的な野生生物の食用や採集活動が影響を受け、制限される恐れがあると考えられた。そこで本研究は、これまでの利用慣行を種類・食用・採集方法を文化資源としてみなし、それらの価値を明確にすることを目的として、汚染の実態把握と影響を調べることを始めた。

放射能測定に関しては、名古屋大学生命農学研究科竹中千里教授が進めている野生植物の放射能測定と、吸収に効果的な種を探し除去に役立てる研究との協働研究を実施してきた。

この研究により染状況の把握、土壌・水-植物循環による汚染度の推定による将来への摂取の安全性の検討への基礎資料を提供し、この文化資源を放射能汚染問題の中に位置づけ、生活の存立のために適切な対応を取られるように、理論的枠組みをつくることをめざすための基礎作業を実施した。

2012年度は、まず、野生生物利用研究の基礎となる利用資源リストおよび年間の野生生物利用の生業カレンダーを作成するための文献資料を収集した。文献資料は、福島県会津地方については多数あるが、その他の地域については資料が少ないため、住民への聞き取り調査が必要であることがわかった。しかし、被害が続く不安定な生活の中で、住民への聞き取りは慎重にならざるをえなかった。

また、サンプリング調査の過程で、放射能の汚染状況が予想以上に深刻であり、また、住民の意識も複雑であり、現地に入って調査していくことの困難さも実感された。本研究が、住民の被害軽減に役立つ研究を目指す以上、住民の意識にたった協力体制を講ずることがまず必要であると考えた。

そこで、現地福島大学の塩谷広康教授・西崎伸子准教授とも協力体制を取り、「放射性物質とマイナー・サブシステム研究会」を立ち上げ、今後の研究の進め方と現地住民との協力・信頼関係作りを行ってきた。福島県への3度(6、12月、2月)の訪問により、体制作りと今後の進め方を検討した。野生採集資源は、当該地域の豊かな食文化を形成する重要な一部を担っていると同時に、道の駅や直売所でも広く販売されており、季節的な収入源としての役割も大きいという点を共通認識とした上で、以下の2点について連携体制を作ることで合意し、共同で研究ならびに実践を進めていくこととした。

研究【経過・成果】の概要 (つづき)

1) 地域の農家が自ら栽培する作物および山菜・キノコなどの野生生物をサンプリングする作業を支援すること、

2) 分析結果をもとにこうした資源の継続の可能性を検討する

そして、現地住民の協力によりサンプリングを行う方向で話し合いを行い、主婦グループ、農協関係者、地元住民グループらの協力を得られることとなった。

これまでの聞き取りからは、種々の野生資源利用（山菜、きのこ、いなご）がこれまで活発に行われてきたことがわかった。また、エゴマ、クルミなど調味料として現地の伝統的食生活で欠かせない食品を半栽培的に積極的に利用していることがわかった。これらは、日常的のみならず行事食でも大切なものであり、食のみならず人生のリズム形成においても重要な役割を担い、住民の健康で文化的な生活を形成する重要な一部になっていることがわかった。しかしながら、放射能汚染を恐れて、今年度の福島県下ではその利用は控えられていたが、食用を強く希求していることもわかった。

また、放射能汚染分析の過程で、放射能汚染が生物種よりも環境条件、土地条件により狭い範囲であっても相当異なることがわかってきた。そこで、汚染の影響を考える上で、当初企図した広域的な分布の把握の前に、ミクロな汚染状況を資源利用と結びつけてサンプリングし、土地構成要素も合わせて分析することが必要であるとの見識にいたった。そのため、位置情報が正確にわかること、そして、サンプリングを住民に依頼する上で、位置情報とともに場所情報も把握・記録されることが重要であるとの結論にいたった。そこで、当初の計画を変更し、この位置・土地情報を記録するための Web-GIS/GPS システム構築を実施することにした。

住民が簡便に正確に、かつ効率よく情報を収集できるように、スマートフォンを利用したシステム構築を行った。位置情報（GPS 情報）を自動的に取得し、土地情報はあらかじめ設定した項目からプルダウン式に選択していくことにより、操作を行い、発信すればサーバに情報が取得されるものである。あわせて現場の写真も同期して取得される。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

本年度はまだありません